

## 農林水産業関連

### 1 ばれいしょ新品種「しまあかり」の産地導入に向けた活動を開始！

10月30日にJAあまみ徳之島事業本部にて、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種「しまあかり」の現地適合性試験に係る説明会を開催し、実証農家14人、関係機関6人が出席した。

今年度は実証ほ場を16地点設け、「しまあかり」の現地適合性を評価する計画で、栽培スケジュールや調査内容、出荷体制等を協議し、実証農家との合意形成が図られた。

農業普及課では、本実証や現地検討会を通して、品種切り替えの必要性及び「しまあかり」の周知を継続して取り組む。



### 2 奄美群島のたんかん振興に向けた産地間交流を実施

11月7日に徳之島町にて、奄美大島・喜界島とのたんかん産地間交流を実施し、生産者及び関係者23人が出席した。

交流では、奄美大島が技術実証に取り組んでいる新たな樹形やせん定方法などの意見交換を実施した。また、生産安定や品質向上に向けた対策として、防風樹の育成方法や鳥獣害対策、施肥方法なども検討した。

農業普及課では、奄美群島のたんかん振興に向けた産地間交流を今後も継続していく。



### 3 高温多雨の影響によりたんかんの肥大は良好

10月28～31日に徳之島町と天城町の生産者ほ場にて、たんかんの成木及び幼木栽培講習会を開催し、延べ90人の生産者及び関係者が出席した。

今年では平年に比べて気温が高く、降水量が多いことから、果実肥大は良い傾向であるが、夏秋梢が多く発生している影響により、赤衣病やかいよう病、ミカンハモグリガなどの病害虫の発生が多い。

農業普及課では、生育状況や病害虫発生状況、気象条件に合わせた栽培管理について講習を行っている。



### 4 散水器具取扱説明会でルールの周知

10月28～29日に徳之島町・天城町・伊仙町にて、徳之島用水土地改良区による散水器具取扱説明会が行われ、延べ80人の受益者及び関係者が出席した。

説明会では、今後水利用面積の拡大が見込まれる中、リレー式給水栓の使用方法や適正に使用しなかった場合の影響について説明した。また、降雨前後の散水によるほ場外への畑かん用水の流出等も散見されることから、節水についても呼びかけた。

農業普及課では、営農も考慮した効果的・効率的な畑かんの利用について、関係機関と連携して推進していきたい。



### 5 営農技術・経営研修会で先輩農家と語る会を実施

11月5日に徳之島町にて、営農技術・経営研修会(新ジャンプ会秋季研修と合同開催)を開催し、生産者及び関係者109人が出席した。

島内でさとうきびを大規模に経営している大竹勝人氏、仲公男氏をパネラーとして、規模拡大や機械導入の経緯、独自の取組、後輩農家へ期待することなどについてディスカッションを行った。

農地に空きがなく、規模拡大を希望する農家にとって、先駆者の取組事例が参考となることを期待したい。



## 6 未来の担い手に畑かんの大切さを伝える



11月13日に、徳之島高等学校で総合学科生物生産系列の2年生9人を対象として畑かん営農講座を行い、徳之島の農業の特徴や畑かんの効果をクイズ形式で説明した。

ほ場では、固定式スプリンクラーや畑かんロールカー、散水チューブの実演を行った。

また、水利用により収量が上がり、作業が効率的になることなどを学んでもらった。

アンケートでは、「農業者から直接畑かんのありがたさを聞いて、未来の島のためにいかしたい」という意見が出された。

## 7 畑かん営農推進に向け、マイスターと意見交換

11月14日に天城町役場で畑かんマイスターと語る会を開催し、畑かんマイスターと関係機関30人で意見交換が行われた。



施設整備や水利用をテーマに、マイスターからの質問や提案に対し、関係機関が取組状況等の説明を行った。

今後も畑かんマイスターや関係機関が一体となって畑かん営農が推進できる体制づくりを継続していく。

## 8 ジオラマを活用した畑かん営農推進

11月23日に天城町・伊仙町、24日に徳之島町で産業祭が開催され、畑かん営農推進を図った。

徳之島ダムの地形ジオラマを活用し、徳之島の農業やダム、畑かんについて簡単なクイズを行った。

小学生から高齢者の113人の回答のうち、106人がスプリンクラーについて知っており、畑かんへの理解が十分に浸透していることが分かった。

今後も関係機関と協力しながら、畑かん営農を推進していく。



## 9 徳之島の生産者が喜界島のかぼちゃ栽培技術を学ぶ

11月19～20日に喜界島にて、抑制かぼちゃ先進地視察研修を実施し、生産者及び関係機関11人が参加した。

本研修では、現地視察や意見交換を行い、喜界島におけるかぼちゃの栽培技術を学んだ。特にソルゴーを利用した防風対策は、徳之島での取組事例が少なく、生産者からは「参考になった」との声が聞かれた。

今回の研修で学んだことを生かし、生産者と関係機関が一体となり、今後のかぼちゃ生産振興を図っていく。

